

学部日本語Ⅲ・Ⅳの概要

森本郁代（関西学院大学法学部／日本語教育センター副長）

1. 学部日本語Ⅲ（春学期）・日本語Ⅳ（秋学期）の目的

2年生対象の日本語Ⅲと日本語Ⅳでは、1年生で培った基礎的な日本語力を土台に、大学におけるアカデミックな活動を十全に行える日本語力を養うことを目指している。

2. 2011年度の授業内容

2011年度の授業内容は以下のとおりである。

日本語Ⅲ

大学におけるアカデミックな活動に日本人学生と同等に参加できるレベルの日本語の能力の向上と、日本語で自分の意見を述べたり批評したりする力を養うことを目的としている。週2回の授業のうち、水曜日は「話す・聞く能力」、金曜日は「読む・書く能力」の育成を目的とした授業を行っている。

・水曜日3限目

ディベート活動を通して、具体的に以下の3つの力を養成することを目的とした。

(1)「考える力」を身に付ける

- ・自分の考え方を整理して、相手に説明する論理的思考力
- ・相手の議論を聞きながら理解し、疑問点を列挙し反論する批判的思考力

(2)情報を収集し、それを使いこなす力を身に付ける

- ・情報・資料の読み方、その価値・重要性の見分け方、およびその効果的な使い方

(3)「コミュニケーション能力」を伸ばす

- ・どんな相手とも対等にコミュニケーションを取れる力
- ・短時間に相手の話を理解し分析する聞き方、質問の仕方
- ・相手の意見の矛盾を発見し、それを明確につく方法

最初はディベートの基本的なルールに慣れることから始め、次第に難易度を上げて学期末には事前準備やリサーチの必要なアカデミック・ディベートへと移行した。

・金曜日1限目

新書『につぼんの知恵』高田公理（著）講談社現代新書を1冊読み、内容を簡潔・的確に要約することと、自分の意見や批評をある程度の長さの文章で書く活動を中心に行った。読み書きの授業は、学生の個人作業に終始しがちであるが、日本語Ⅲでは、ピア・リーディング活動を導入することで、互いの見方や解釈を共有することでテキストの理解を深め、意見や批評の論点を発見することを試みた。

日本語Ⅳ

「伝統文化と日本人の心理」「異文化理解」「情報化社会」「メディアと文化」の4つ

のトピックのいずれか一つに関するテーマを自分で設定して、小論文の作成と論文の内容のプレゼンテーションを行うことで、アカデミックな活動に必要な日本語能力の総合的な力を養うことを目的とした。授業ではテーマの決定から、先行研究の調査、アンケート調査の実施と分析を行い、それを踏まえて 5000 字程度の論文を書くまでの各段階を 1 学期間かけて学生に課した。なお、日本語Ⅳでは、水曜日と金曜日の担当者が連携して授業を進めた。

3. 日本語Ⅲ・Ⅳの成果と課題

日本語Ⅲ

授業評価アンケートの結果を見ると、ディベート活動を通して、大学生として必要な論理的思考力や説明・説得力を身に付けられる点が学生に評価されていた。また、ディベートが初めての学生でも、学期末には事前準備やリサーチが必要な難易度の高いアカデミック・ディベートができるレベルに到達するよう、各回の授業を体系化しているため、学生が自分の能力の伸長を実感できるようである。その一方で、ディベートは「立論」「反駁」など役割が決まっており、役割によって求められる能力や難易度も異なるため、学生の成績評価の際にどのような基準を設定すべきかはさらに検討する必要がある。

金曜日の授業に関しては、ピア・リーディング活動を導入したものの、活動の内容が学期が進むにつれてルーティーン化したことで、学生に慣れが生じ、積極的に取り組む姿勢が少なくなってしまう。今後は、授業活動や課題の難易度を段階的に上げるなどの工夫が必要であると思われる。

日本語Ⅳ

5000 字の小論文を書き上げるという課題は学生にとってかなり高いハードルであるが、その分書き上げた達成感は大いことが、授業評価アンケートから見てとれた。試行錯誤の結果論文を書き上げたという経験を持つことの意義は非常に大きいと思われる。その一方で、1 学期間に多くのことを要求するため、各段階の指導が不十分になってしまうという点が問題として挙げられる。この点については、夏休み前にテーマについての事前調査を課すなどして、指導時間をできるだけ確保する方策を検討中である。

4. 今後に向けて

ここ数年、留学生の背景の多様化や、難民学生の受け入れに伴い、受講生の日本語のレベルに大きなばらつきが見られるようになってきている。本学の日本語ⅢとⅣが目指す、批判的思考力や論理的思考力、説明・説得力などのアカデミックな能力の育成と、受講生の日本語能力の底上げとを同時に達成するべく、さらにシラバスの改善に努めたい。